

ある市民の願い

日本人が世界に胸を張れる研究をして下さい

和田昭允

この「議論の広場」の、「科学を知らないとは、科学の知識がないという意味ではない。人間にとって科学がもつ意味を知らないという意味である」ではじまる、市川惇信氏の論文『「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」の解釈』(以下市川論文)を読んだ。(傍点筆者、以下同じ) 仰っていることに全面的に賛成である。

とくに『社会と科学の関係が再確認されたのではなく、これまでの三項目に新たに加えられたことが歴史的なのだ……宣言を見ても「知識のための科学：進歩のために科学」は最初に掲げられている』や、明治のお雇い医学者ベルツの『「日本人が科学を機械と考えて、いつでもどこへでも動かして、そこで仕事をさせうると考えているのは誤りである(ベルツの日記)」』の引用(註記1)、そして『宣言の一部を強調し、発見の時代は終焉した、科学は工学プロジェクトを指向すべきとするのは専横であり、ソ連時代に食糧生産の拡大を目指して獲得形質の遺伝の研究を強制した当時のあるソ連科学アカデミー会員の行為を連想させる』など、同感のくだりが多い。

ここで私は、屋上屋の愚を避けるために、全く立場を変えて、“ひとりの善良な市民”として発言する。研究者が真理に対すると同じく社会に対しても誠実であるためには、市民の“心”が科学と技術に何を期待しているかを正しく知り、正面から応えなければならない、と思うからである。それは、われわれの“探究心”という動機から発する研究にも、決して矛盾するものではない。

市民の“心”は、なにを求めているか？ 国が行った生活関連科学技術に関する意識調査によれば、市民の科学技術に寄せる期待は：危険を予知し、生活の安全を確保して欲しい。生活に快適さと便利さを与えて欲しい。貧困、疫病、天災、等

の種々の悪からの不安を取り除いて欲しい。生活に豊かさを与えて欲しい、などにある。これに加えて、「世界最高の科学技術国日本」を誇りに思う一市民である私は、次のように願う。

科学者・技術者は、日本が世界の尊敬を集める研究、日本人が世界に胸を張って誇れる研究をして欲しい。

具体的には

- ・重要課題を発見、解決し、科学史・技術史の一章を書く研究。
- ・独自のコンセプトから説き起こし、研究者名を冠した理論、実験、公式など、多くの研究の基盤となる研究。
- ・幅広い応用展開の基盤となり、日本・世界の産業の発展に貢献する研究。
- ・日本のイニシアティブで世界の衆知を集め、人類福祉のための科学技術を築く国際協働研究。
- ・国際社会の強い共感と関心を呼ぶ研究。
- ・とにかく“美しい”研究。“夢やロマンを呼ぶ”研究。

をして欲しいのだ。私が1954年に、まだ三流国と言われた日本から米国に留学したとき「ユカワの日本から来たのか」と言われて、どんなに誇らしくまた自信を持ったことか、今更ながら思い出す次第である。大型車に混じってスーパーハイウェイを健気に走る小さな日本車をみて、涙が出たこともある。最近も「ハヤブサ」の例など、枚挙にいとまがなく、言うのも野暮である。

市川論文に対して独立行政法人科学技術振興機構(JST)が運営するサイエンスポータルが、二つの意見は本来並立すべきものである、との基本を示す。その上で、JSTの使命は「社会における科学と社会のための科学」であり、科学・技術予算といった話になるとそうもいかない、という機構の立場を説明する(註記2参照)。

私は市川氏も、やり玉に挙げられた上席フェロー氏も、ともによく存じており、それぞれ立派な研究者である。またJSTは、私が40年お手伝いしてきた日本の科学技術振興のためになくてはな

らない政府機関だ。それにもかかわらず，“本来並立すべきもの”が並立できない！この矛盾はどこから来るのだろうか？

それは「なにが一番大切か？」の次元の違いであることは明白だ。そこで私は、JSTが「より高い視点と広い視野」をもって、“社会のための”の次元を市民の心のレベルにまで高めれば同じ立場に立てると信じて「世界の尊敬を集める研究、国民が誇れる研究を」と上述の願いをした次第である。素朴ではあるが、これが先進国のみならず、知的である限りどこの国にもある市民の“心”だ、と信ずるからだ。

市川論文の最終パラグラフには『私は強く信じている。優れた日本の研究者は、お仕着せのシナリオに沿った研究は誰でもができる研究であり、優れた研究者にふさわしくないと考え、その枠を超えて先人のいない研究に挑戦する勇気をもっておられることを。……科学者一人ひとりが感覚を鋭くして自らが最善と考える研究を行うことが、ホモ・サピエンスがもつ知としての科学の根源にあることを、研究者はしっかりと噛みしめながら研究』して欲しい、と結ばれている。

関係諸賢におかれては“日本国民の誇りに貢献できるか？”と自問自答しながら、それに応えていただきたい。

註記1：ベルツの日記には、ヨーロッパ文明を誇る以下の文が続く——『西洋のサイエンスの世界は決して機械ではなく、ひとつの有機体でありまして、その成長にはほかのすべての有機体と同様に一定の気候、一定の大気が必要なのであります。しかしながら、地球の大気が無限の時間の結果であるように、西洋の精神的な大気もまた、自然の探究、世界のなぞの究明をめざして幾多の傑出した人びとが数千年にわたって努力した結果であります。それは苦難の道であり、汗—それも高潔な人びとがおびただしい汗で示した道であり、血を流しあるいは身を焼かれて示した道であります。それは精神の大道であり、この道の発端にはピタゴラス、アリストテレス、ヒポクラテス、アルキメデスの名前が見られますし、この道の一番新しい目標の石に

はファラデー、ダーウィン、ヘルムホルツ、フィルヒョウ、パストール、レントゲンの名前がしるされています。これこそヨーロッパ人が到るところで、世界の果てまでも身につけている精神なのであります』

註記2：市川論文に対する科学技術振興機構の記事 (<http://scienceportal.jp/news/review/1009/1009061.html>) .

『市川氏にやり玉に挙げられた形の科学技術振興機構が力を入れているのは、確かに「課題解決型研究」への支援である。「知識のための科学：進歩のための科学」ではなく、「社会における科学と社会のための科学」という使命に沿うものといえる。両者は本来、並立すべきものなのだろうが、科学・技術予算といった話になると、そうもいかないということだろうか。ブダペスト宣言が採択された世界科学会議にも参加し、この宣言の意義を高く評価する吉川弘之・元国際科学会議会長は、次のように言っているのだが。

「宣言の採択は、科学は社会から影響を受けず、独立していなければならないとされた長い歴史を軌道修正する、重大な瞬間であったと思う。この決定の意味は、科学研究の重点が基礎から応用へ移るということではない。したがって科学研究が知的好奇心に導かれて行われることを決して否定するものでもない。むしろ、新しい困難な課題を抱えた現代は、従来は考えつかなかったような独創的視点での科学の展開が期待されるのであって、そのためにはますます研究者個人に関心に基づく自由な基礎研究が必要である」(2009年1月1日オピニオン・吉川弘之氏・産業技術総合研究所理事長、元国際科学会議会長)』